

2022年5月22日

「教員」という職業

群馬大学 小林春夫

若いときは生まれ育ったところから学校、就職、そして世界へどンドン外に出ていこうとする。外の世界、大海原を求める。やがてある年代になると生まれ育った地元に戻りたくなる。昔の友人と旧交を温めたくなる。人も「母川回帰」を行う。

20年以上前に小学校の同窓会に出席したことを思い出す。担任をしてくださった先生が次のように話されていたのを記憶している。「自分が師範学校を卒業して最初に教職を得たのは日本ではなく韓国・朝鮮であった。そのときの教え子の数人が同国で幹部になり、以前招かれたときに大歓迎を受けた。到着した空港に自分の名前を入れた歓迎の大きな垂れ幕をだしてくれて、非常にうれしかった。このときのことは日本に帰ってから地元の(日本の)新聞にも写真入りで大きく取り上げてくれた。」同窓会ではその新聞記事のコピーを回覧してくれた。

そのとき「確かに立派な先生であるが、小学校時代の先生に対して卒業生はそこまでするのか」と思った。「自分も教員であるのに大したことはない」、「自分は恩師にもそこまでできない」という二つのコンプレックスを差し引いてもである。

後日 韓国・朝鮮の「師を大事にする」という儒教的文化もその理由の一つではないかと気が付いた。中国からの留学生は「中国では一日でも自分の先生であった人は一生自分の先生であるという教えがある」と話している。

世界情勢が非常に難しい時期である。研究教育に携わる者は現場で草の根的に何かできることがあるのではないかと思う。